



情報理論とその応用学会ニュースレター

藤原値賀人先生を偲ぶ	岡育生 (大阪市立大学)
ISIT2008 参加報告	井坂元彦 (関西学院大学)
Turbo Coding 2008 参加報告	渋谷智治 (上智大学), 和田山正 (名古屋工業大学)
2008 年度第 3 回理事会報告	
2008 年度総会報告	
ニュースレター原稿募集	

藤原値賀人先生を偲ぶ

岡育生 (大阪市立大学)

本学会正会員、藤原値賀人先生には、かねてより病
気療養中のところ薬石効なく、去る 10 月 11 日 (土)
に逝去されました。

先生は、平成 16 年 3 月大阪市立大学大学院工学研
究科を退職されると同時に、大阪成蹊大学現代経営
情報学部現代情報学科に赴任され、学科長として大
学の運営ならびに教育に情熱を傾けておられました。
入院中におかれましても、待ち行列の動きを視覚的
に理解するためのソフトウェアをノート PC にイン
ストールして、効果的な教育法について楽しそうに
話されていましたが、いったん退院された後、再度、
入院され 10 月 11 日に 68 年の生涯を終えられまし
た。先生は、本学会シンポジウムならびに国際シン
ポジウムにも、度々、参加しておられます。先生を
思い、このニュースレターにおきまして、先生のご
業績を簡単にご紹介させて頂きたいと思います。

先生は、昭和 39 年大阪大学工学部通信工学科をご
卒業後、昭和 45 年 3 月に大阪大学大学院工学研究
科通信工学専攻博士課程を修了されました。この間、
昭和 41 年より昭和 42 年まで株式会社安川電機に勤
務され、制御用コンピュータのインタフェース設計
に従事されました。昭和 45 年、大阪大学工学部通信
工学科助手となられ、翌年 4 月、大阪市立大学工学

部電気工学科助手となられました。その後、講師、助
教授を経て平成 2 年 4 月より大阪市立大学工学部情
報工学科教授に就任されました。

先生は、誤り制御、誤り訂正符号、フロー制御、変
復調方式、通信プロトコル、マルチメディアデータ
転送技術など、本学会の領域をはじめ、多岐にわた
る研究に従事され、数多くの優れた業績をあげてお
られます。特に、誤り制御の分野では、現在の情報
通信には必要不可欠である効率的な再送方式に関し
て、通信分野がまだ黎明期である段階からいち早く
着目され、これらの性能を理論的に明らかにされる
とともに、有効な方式を提案されてきました。また、
ローカルエリアネットワークの分野におきましても
イーサネットの理論的限界に迫るスループットを実
現する方式や、MAN における種々の問題点を改善
する方式を提案されるなど、情報通信工学分野にお
いて多大な貢献をされました。

学会活動として電子情報通信学会では、関西支部
評議員、教科書委員会委員を歴任され、同分野の発
展にご尽力されました。国外では、米国数学会レ
ビュウ、シドニー大学の学位審査員および人事審査
員、また、IEEE の COMSOC 技術委員会アジア太
平洋委員会代表委員、同大阪ワークショップ、およ

び, IEEE 情報理論国際シンポジウム (ISIT) 等の
実行委員などを務められ, 学術の国際交流の発展に
も大きく貢献されました。さらに, 大学基準協会相
互評価委員会委員, 大阪府地域産官学交流促進事業
運営委員会委員長, 高度情報化推進委員会「地域映
像情報全国発信連絡会」座長, 近畿ニューメディア
推進協議会理事など, わが国における通信行政, 地
域行政にも大きく貢献されました。

大阪市立大学におきましては, 学術情報総合セン
ター建設推進委員会副委員長, 同情報部会長として
同センターの設立にご尽力されるとともに, キャン
パス LAN 建設推進委員長として, 当時日本の大学
では数少ない, 全学規模の最先端キャンパスネット
ワークの構築に貢献されました。工学部情報工学科
設立におきましても主導的な役割を果たされるとと
もに, 大学評議員として大学発展のために力を注が
れました。また, 大阪成蹊大学現代経営情報学部現
代情報学科設立にもご尽力され, 設立後には学科長
として大学運営に貢献されました。

先生の研究に対する取り組みは並大抵ではなく, 徹
底的に納得するまで突き進まれるもので, この精神
は研究面のみならず, 趣味の領域に対しても同じで
した。ご存じの方も多いかと思いますが, オーディ

オ, カメラ, IT 家電, 車などに関して先生の右に出
る人は, おそらく, いなかったと記憶しています。先
生の指導を受けた者を代表しまして, ここに改めて,
先生に感謝するとともに, ご冥福をお祈り申し上げ
ます。



2006 年 ヨセミにて

ISIT2008 参加報告

井坂元彦 (関西学院大学)

ISIT2008 (2008 IEEE International Symposium
on Information Theory) は, カナダ・トロント市の
シェラトンセンターにて, 2008 年 7 月 6 日から 11
日にかけて開催されました。例年通り月曜日から金
曜日まで連日, 水曜の午後を除けば朝から夕方まで
セッションが組まれており, 500 件ほどの論文発表
がなされる大変盛況な会議でした。

最近数年は初日の日曜日に有料のチュートリアル
講演を実施することが定着しており, 私は午前中に相
関のある情報源に対する符号化に関する Ramchandran
教授 (UC バークレー) のセッションを聴講し

ました。Slepian-Wolf や Wyner-Ziv の符号化の考
え方がセンサーネットワークやビデオ符号化で応用
を持つことは知ってはいますが, 実際に映像を見せ
られるとなかなか説得力があります。ところで, 私
が大学院生の頃に行われた電子情報通信学会の大会
における企画で, 某先生が「多端子情報理論などは
決して役に立たないが, 自分たちはそれを世を忍ん
で研究する“隠れキリシタン”である」という話をさ
れ, パネル・ディスカッションはこの言葉を軸に盛
り上がったことを思い出し, 時代の変化を感じてし
まいました。まだ, たった 12~13 年前の話です。

ISIT2008 に話を戻しますが、シャノン・レクチャーと基調講演が行われる朝のセッションの講演者は、

- Robert Gray 教授 (スタンフォード大学), シャノン・レクチャー “Source coding and simulation”
- A. Robert Calderbank 教授 (プリンストン大学) “Golay, Heisenberg and Weyl”
- Alon Orlitsky 教授 (UC サンディエゴ) “From two to infinite: Information theory and statistics for large alphabets”
- Emanuel Knill 博士 (NIST) “Building quantum computers”
- Avi Wigderson 教授 (Institute of Advanced Study) “Randomness - A computational complexity view”

でした。昨年の ISIT2007 ではシャノン理論が重点的に扱われていたように思いますが、今年はレーダから量子計算機に至るまでバラエティに富んでいました。どれも興味深いものでしたが、個人的には普段お目にかかる機会のない Wigderson 教授が計算量理論の話題を最近のトピックスを含めて非常にわかりやすく説明されたのが勉強になり、また印象的でした。また、Orlitsky 教授の紹介のために壇上に現れた某教授によるトークが 5 分以上に及び、ベル研でのケーキ焼きコンテストの話聞きながら一体いつまで喋るんだろうかと心配にもなりました。

通常のセッションについては、セッション名から一目で分野がわかるものに絞って私なりに列挙してみたところ、件数の多い分野は以下になりました (順不同)。

- 符号理論: 23 セッション (うち、LDPC 符号関連 12 セッション)
- ネットワーク符号化: 7 セッション
- 暗号・セキュリティ: 11 セッション
- マルチアンテナ通信路: 10 セッション
- 系列: 6 セッション
- 中継通信路: 7 セッション
- 情報源符号化: 7 セッション

- シャノン理論: カウント不能
- その他: 多数

これは見識の浅い私が短時間で数えただけのものですので、あくまで目安とお考えいただければと思います。また、シャノン理論については無線通信路に関連したものを中心に多岐にわたっており、どこまで数えればよいか判断が付きませんでした。

ISIT のシンポジウムで符号理論が占める位置がやや弱くなっているのではないかと、という印象 (個人的には懸念) を最近何となく受けていましたが、実際にセッション数を数えてみるとまだまだ活発に研究発表がされていることがわかります。色々な分野のセッションに出てみたい気もしましたが、今回は楫先生から 9 月に沖縄で行われた LDPC ワークショップで ISIT2008 の報告をせよ、との指令を受けていましたので、LDPC 符号のセッションは多めに聴講するように心がけました。そのような義務があると、普段よりも目的意識を持って聞くことができたような気がしていますので、楫先生には感謝しています。LDPC 符号関連では、最適化に基づく復号法に関する話題で 1 セッションができており、またその他のセッションでも漸近的な符号の解析、もしくは復号法の解析など盛り沢山です。

その他では、“compressed sensing” のセッションは案の定、大入りで来年にはさらにセッション数が増えているような気がします。なお、本年の IEEE IT ソサエティ論文賞も、この話題を切り拓いた 2 本の論文に対して贈られるとの発表がアワード・ランションで行われました。また、フラッシュメモリに対する符号化のセッションでは、全発表が同一著者の研究グループによるものでしたが、何気なく入ってみたところ大変多くの参加者を集めていて驚きました。“rank modulation” という方式の提案とその解析が主たる話題でしたが、それを目当てにやって来た人が多かったようです。

また、今回の ISIT2008 から学生論文賞が創設され、EPFL、プリンストン大、スタンフォード大の学生が表彰されました。来年は日本の大学院生の活躍に期待したいと思います。

恒例の水曜午後のエクスカージョンは、ナイアガラの滝観光で、そのスケールには圧倒されました。前年度のニースと異なり、食事面での魅力には乏しい一週間でしたが、このツアーの夕食バイキングで出たローストビーフに救われた思いがした記憶があります。このツアー以外は、空き時間に CN タワーの展望台にあるガラス張りのフロアの上に立って生きた心地がしなかったことを除けば、食事のための徒歩を除いてほとんど街を出歩いておらず、セッションに出ていた模範的な？シンポジウムの参加者だったのかも知れません。

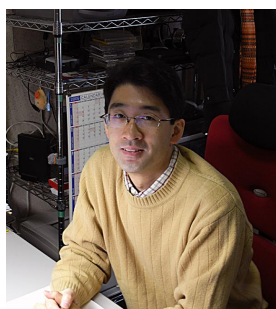
なお、シェラトンホテルはツインタワーとなっており、クイーンズ通り側の棟ではシンポジウム最終日の夜、深夜 3 時頃に火災騒動（実は警報装置の誤作動）があったようです。けたたましいサイレンで叩き起こされ、にも関わらず館内放送で「部屋から出ないように」という通常では考えられないような指示があって安眠を妨害された参加者が多かったと聞きました。なお、私はリッチモンド通り側の建物

に泊まっていたために難を逃れたのか、それとも空襲警報なみ？の大音量のサイレンにすら気づかずに朝まで寝ていたかどうかのようです。

来年の ISIT2009 は韓国ソウル市で開催され、2008 年度のシャノン賞受賞者の Jorma Rissanen 博士がシャノン・レクチャーをされる予定です。会場は、ICC2005 や ISITA2006 と同じソウル市南部の COEX となります。インチョンの国際空港から直通バスが到着するエアターミナルも同じ敷地に併設されているなど日本からのアクセスがよい立地です。私は出張が楽に済むことから、3 回目の COEX とはいえ、大変好意的に考えています。しかしながら、シンポジウムといえば温泉・アルコール、それがなければせめて観光、という思考回路から逃れられない日本国内の情報理論屋さんからは落胆の声も漏れ聞こえてきます。そんなことは言わずに、せっかく近隣国で開催される機会ですから、多くの方が参加・発表されればと思います。

Turbo Coding 2008 参加報告

渋谷智治（上智大学）、和田山正（名古屋工業大学）



渋谷智治（上智大学）



和田山正（名古屋工業大学）

渋谷（以下、渋） SITA 編集理事の杉村先生より、2008 年 9 月に開催された Turbo Coding 2008 への参加報告の執筆依頼がございました。今日は会議の概要や印象などについて振り返ってみたいと思います。どうぞよろしくお願いします。

和田山（以下、和） どうぞよろしくお願いします。
渋 まずは会議の目的についてですが、確か和田山さんは Turbo Coding が始まった初期のころに参加されていたんじゃないかと思います。当時のことを振り返って、この国際会議の目的や性格についてご



図1 ローザンヌ旧市街からレマン湖を望む



図2 会場となった EPFL SG ビルディング

紹介いただけませんか？

和 このシンポジウムの参加は第3回のプレストときと今回の2回だけです。ターボ符号、ターボ等化、LDPC 符号などの研究者が集まる会議で、反復復号・反復推定が会議の基調となっている感じです。発表の内容は、理論的な研究やかなり実装に近い研究などかなりバラエティに富んでいます。もともとがターボ符号の産みの親の C. Berrou 教授のまわりで始まったみたいですね。

渋 その第5回目ということで、今回はスイスのローザンヌにある Ecole Polytechnique Federale de Lausanne (EPFL) で開催されたわけですね(図1、2)。私は今回初めてローザンヌを訪問しました。レマン湖畔にある古都で、古い街並みと近代的な都市機能が調和した美しい街でした。開催時期が9/1(月)

~9/5(金)であったこともあって気候にも恵まれ、物価が非常に高いことを除けば大変過ごしやすい街でした。このローザンヌの中心からトラムに乗って15分ほどの郊外に、会議の会場となる EPFL がありました。

和 確かに物価が高いのにはビックリでした。会議の開催時には、円が相対的に今に比べて弱かったこともありますね。帰ってからカードの支払い明細をみたときには青ざめました。ローザンヌの町は ISIT で以前訪ねたこともあったのですが、住みやすそうな町ですね。EPFL といえば、LDPC 符号の研究で世界的に著名な Urbanke 教授がいらっしゃるわけですが、今回は彼がローカルの手配などをされていました。会議キットやマグカップのデザインにも彼のウィットとユーモアが感じられるものでした。今



図3 一般セッションの様子



図4 ポスターセッションの様子

回のシンポジウムでは、学会のオフィシャルエクスカージョンとして、Cern の LHC(大型ハドロン衝突型加速器) 見学が組まれていたのですが申し込みが遅れて参加できず大変残念でした。ちょうど LHC 稼働の直前だったため非常に人気があったようです。

渋 EPFL ではアジア系の留学生をかなり見かけましたので、私たちもなんとなくキャンパスに溶け込んでいたように思います。ところで、手元の資料によると、今回の Turbo Coding では、招待講演が 6 件、一般講演が 42 件 (図 3)、そしてポスター発表として 32 件の論文が発表されました。かなりの件数のポスター発表がプログラムに組み込まれているところが ISIT と大きく異なる点ですね (図 4)。

和 そうですね。ISIT でも最近だとリーセントリザルトのポスターをやっていますが正規のプログラムには入ってませんしね。ポスターだと発表者に質問しながら話を聞けるのがなかなか良い感じです。オーラルだと案外、途中で分からなくなってしまうとハイそれまで、となってしまう場合も多いのですが、ポスターの場合だと分からないところを聞き直せるというのはありますね。また、それ以上に発表者と直接コミュニケーションする機会があるというのも色々良い面があります。渋谷さんはポスターはどうでしたか？

渋 英語を聞き取ること一杯一杯で内容の理解がおろそかになりがちなのは私にとっては、自分のペースで聞くことのできるポスターは本当にありがたいです。発表者からは嫌がられると思いますが、式の導出まで突っ込んだりできますし。あとは、若い学生さんがのびのびと発表に取り組める点も非常に良いですね。こういう場での経験は研究者としての大きな財産になると思います。その他にも、ポスターセッションでは企業からの発表がかなり多いということにも興味を持ちました。

和 PC 用の評価ボードの実機を持ち込みデモをしているところもありました。やはり目の前で動いているのを見ると説得力があります。復号器のアーキテクチャなど実装の話は国内ではなかなか聞けないですね。国内のメーカーで、かなり技術的ハード

ルが高い課題に挑戦されているところもありました。海外でそういうのを見ると単純ですが嬉しくなっていますね。

一般講演は理論的なものから実践的なテーマまで多岐に渡る講演がありました。個人的な好みでどうしても理論の発表に興味が行きがちなんですが、例えば、Sason 教授や Urbanke 教授のグループの発表には、いつもながらのレベルの高さを感じました。また、国内から参加している学生さんたちのしっかりした発表している姿を見ることができたのは心強かったですね。

渋 Turbo Coding のもう一つの魅力は、招待講演が充実していることを忘れてはいけませんね。今回も非常に力が入った 6 件の講演がありました。一応ここでまとめておきましょうか。

■招待講演一覧

1. The Genesis of Coding Theory, D. Costello (Univ. of Notre Dame, USA)
2. On the correction of a Fixed Fraction of Errors in LDPC Codes Using Iterative Decoding Algorithms, D. Burshtein (Tel Aviv Univ., Israel)
3. About Rate-1 Codes as inner Codes, C. Berrou (ENST Bretagne, France)
4. Iterative Codes for Measurement, Detection and Sensing, Montanari (Stanford Univ., USA)
5. Iterative Decoding of Quantum Codes, P. Vontobel (HP Lab., USA)
6. Cooperative Communications and Coding, G. Kramer (Bell Lab., USA)

渋 どれも事前に十分に準備された丁寧な講演で色々勉強になりましたが、私は特に 5 番目の講演に興味を持ちました。前半は量子誤り訂正符号の入門的な内容で、古典的な誤り訂正符号との対比を軸にわかりやすく解説されていたのが印象的でした。

後半は、量子誤り訂正符号に対する反復復号の応用に関する現在の研究の紹介で、この講演スライドだけで最近の主要な研究成果が網羅されているという感じでした。

和 Costello 教授の講演は、符号理論の発展を創世記 (Genesis) になぞらえて辿るというもの。ベテランならではの内容とも言えますが、最近の展開についての彼の意見が見えず、そのあたりのもう少し突っ込んだ話が聞きたかったですね。しかし、後半のアメリカ大統領選をからめたアメリカンジョークコーナー？は半分ぐらいしか分かりませんでした。面白かったです。Burshtein 教授は、私の中のヒーローの一人とっていいぐらいの研究者の方です。今回の話も地味ながら、学ぶべきものが多々ありました。反復復号法で確定的に何個までの誤りを訂正できるか、という内容のものです。メッセージパッシングアルゴリズムについて何か確定的なことを証明することの困難さが伺える内容でした。たぶん実用的側面からだけ判断するとこの種の研究の良さが見えないんじゃないでしょうか。

洪 落ち着いた語り口で緻密な内容を説明される Burshutein 教授の講演は「ジワジワと効いてくる」感じで、聞いていて心地よい講演だったように記憶しています。

ところで、主催者からの公式な発表はありませんでしたが、初日の一番最初の招待講演の聴衆はおよそ 120 名でした。会議の参加者もおそらくこの位かと思いますが、「参加者の顔が見える」ちょうどよい規模だと思いました。その一方で、2006 年にミュンヘンで開催された前回と比べると、参加人数がやや減ったようにも感じられました。他の国際会議との併催であった前回と直接比較することは困難かもしれませんが、それ以前の Turbo Coding と比べて参加人数についてはどのような感想を持たれましたか？

和 第 3 回のときの細かい記憶が定かではなく、サーカスを見ながらのバンケットであったということだけが妙に記憶に残っています。ということであまり参加人数の比較という点から確かなことはいえませんが前のほうが大分多かったような印象があります。

ある意味、過渡状態から定常状態に移行しつつあるのかもしれませんが。お茶の時間に前から話したいと思っていた人たちに話しかけるチャンスが多いのはいいことですね。今回は随分、色々な方と議論することができました。なかなか ISIT では有名な研究者の方は囲まれてしまっていてこうはいかないです。大規模な国際会議にはない良さがこういうところにあるのだと思います。

洪 たとえば、人数が減少した原因が、Turbo 符号や LDPC 符号の研究が頭打ちになっていることの表れであるというのは杞憂でしょうか？

和 頭打ちというか、できることはもうしてしまったし、できないことはとても難しい、というどの分野でも成熟ののちに到達するある種の平衡状態にそろそろこの分野も到達しつつあるのかもしれませんが。私自身はまだ色々面白そうな話が残っていると思っていますし、ある意味ニッチを狙っていますので、この分野の人気があるうとなかろうとあんまり気にならないのですが、渋谷さんはどのようにお考えですか。

洪 誤り訂正問題という観点からすると、Turbo・LDPC 符号に関する研究がある種の平衡状態に達しつつあるという和田山さんのご意見には私も肯く部分があります。実際、Turbo・LDPC 符号の設計手法がある程度見えてきているわけですが、それらを素材とすることによって、様々な実験を目的に合わせて効率よく行えるようになったという見方もできると思います。私自身、周辺分野の新しい成果の有効性を検証する場として実験を行うこともあります。そして、そのような実験の中から、逆に周辺分野を刺激する新たな知見が得られる可能性はまだまだあるようにも感じています。いずれにしても今後の動向に注目する必要がありますね。ところで、次回開催は 2010 年、Turbo Coding 発祥の地であるプレストに戻るようです。

和 プレストは、フランスの西の港町で特に珍しいものがあるわけではないですが、港町だけあって魚はうまかった印象があります。また、この町は、ブルターニュ文化圏に属していて、ケルト文化の影響

化にあるところが他のフランス中央の都市との違い
かもしれません。近くのカンペールなど中世の雰
囲気を残している町も近くにあります。カンペール陶
器の素朴な絵付けはなかなか素敵です。

渋 美味しいワインと料理を訪ねるのは、ヨーロッ
パで開催される国際会議に参観する際のもう一つの
楽しみですね。パリや南仏とは違った雰囲気というの

も、写真を趣味にする私たちには魅力的です。こ
んな風に行くと「何しに行っているんだ」という声
が聞こえてきそうですが。がんばって論文を書きます。

それでは、そろそろ時間が来たようです。今回は
ありがとうございました。

和 ありがとうございました。

2008 年度第 2 回理事会報告

情報理論とその応用学会

2008 年度第 3 回理事会

2008 年 10 月 8 日 (水) 12:00 ~

於 鬼怒川温泉あさやホテル「つどい」

(栃木県日光市)

議事次第

1. 会長挨拶
2. 2008 年度第 2 回理事会議事録確認
3. 2008 年通常総会について
4. 2007(会計) 年度決算報告および監査報告
5. 2008(会計) 年度予算案および収支中間報告
6. 2008 年度事業中間報告および 2009 年度事業
計画

7. 2008 年度ニューズレター発行状況および
2009 年度発行計画

8. SITA2008 開催報告

9. SITA2009 準備状況報告

10. ISITA2008 準備状況報告

11. ISITA2010 準備状況報告

12. 2009 年度役員候補について

13. SITA シンポジウム予稿集 DVD-ROM 残部
の販売について

14. 入退会者の承認・会員種別の変更について

15. SITA の将来方向を検討する WG について

16. その他

- (a) SITA メールマガジンの運用方針の変更
について

2008 年度総会報告

情報理論とその応用学会

2008 年度通常総会

2008 年 10 月 9 日 (木) 17:00 ~

於 鬼怒川温泉あさやホテル「華厳-1」

(栃木県日光市)

議事次第

1. 会長挨拶
2. 2007 年度事業報告
3. 2007(会計) 年度収支決算報告および監査報告
4. SITA2007 収支決算報告および監査報告
5. 2008 年度事業中間報告

6. 2008(会計) 年度予算案および収支中間報告

7. SITA2008 開催報告

8. ISITA2008 準備状況報告

9. 2009 年度事業計画

10. SITA2009 開催計画

11. ISITA2010 開催計画

12. 2009 年度役員選挙

13. 名誉会員の推薦について (報告)

14. 会則・細則の変更案について

15. その他

- (a) SITA の将来方向を検討する WG に
ついて

ニュースレター原稿募集

ニュースレター編集担当では、会員の皆様からの原稿をお待ちしております。研究会やワークショップなどの call for papers や国際会議などの参加報告、会員の声など、気軽に投稿して下さい。

ニュースレターは、年に 4 回の発行を予定しております。原稿は随時投稿を受け付けており、原稿を

頂いた時点での最近号に掲載する予定です。原稿は、できるだけ $\text{\LaTeX}$ のソースファイルが望ましいですが、その他の形式でも受け付けます。写真などの掲載も歓迎します。詳細は、巻末の編集理事・幹事にお尋ね下さい。

編集後記

現在の編集スタッフの最後のニュースレターになりました。紙面を借り、この 1 年のあいだご執筆頂いた方々にお礼を申し上げます。有難うございまし

た。また、どこかで皆様にお会いできることを楽しみにしています。
(杉村、西新)

編集担当者

杉村立夫（編集理事）

〒380-8553 長野県長野市若里 4-17-1

信州大学工学部電気電子工学科

Tel. 026-269-5237

Fax. 026-269-5220

E-mail: tsugimu@gipwc.shinshu-u.ac.jp

竹内純一（編集理事）

〒819-0395 福岡県福岡市西区元岡 744

九州大学大学院システム情報科学研究院情報工学部門

Tel. 092-802-3621

Fax. 092-802-3626

E-mail: tak@csce.kyushu-u.ac.jp

西新 幹彦（編集幹事）

〒380-8553 長野県長野市若里 4-17-1

信州大学工学部電気電子工学科

Tel. 026-269-5249

Fax. 026-269-5220

E-mail: mikihiko@shinshu-u.ac.jp

實松豊（編集幹事）

〒819-0395 福岡県福岡市西区元岡 744

九州大学大学院システム情報科学研究院情報工学部門

Tel. 092-802-3624

Fax. 092-802-3624

E-mail: jitumatu@csce.kyushu-u.ac.jp

情報理論とその応用学会事務局

〒619-0237 京都府相楽郡精華町光台 2-4

NTT コミュニケーション科学基礎研究所 村松 純 気付

E-mail: sita-office@sita.gr.jp

URL: <http://www.sita.gr.jp/>